



お取引様各位

2024年3月29日  
ユアサ木材株式会社

平素は大変お世話になり、ありがとうございます。  
各地駐在員、エージェントから入りました地域別産地情報を連絡させていただきます。

## No. 253

### マレーシア

AA) トピックス :

#### ● 半島北西部で40度超も＝熱波が継続中

マレーシア気象局 (MetMalaysia) は3月24日、同局のFacebookでの天気情報において、マレー半島の29地域、サラワク州の3地域、サバ州の1地域に対し「レベル1の熱波」警報を発令した。マレー半島ではクダ州の10地域、ペラ州の41地域のほか、パハン州、ジョホール州、クランタン州、マラッカ州の一部でこうした熱波が記録されている。これに加え、ペルリス州、ペラ州、サバ州の一部では、24日午後までに少なくとも3日連続で最高気温が37～40度の範囲とされる「レベル2の熱波」が記録された。保健局は、レベル1の高温警報が発令され、気温が35度を超える場所にある学校は、教室外での全ての活動を一時的に中止するよう助言を行っている。  
因みに、マレーシアにおいて「熱波状態」とは、毎日の最高気温が37度を超えることを指す。

#### ● インフレ率、2月は1.8%上昇

マレーシア統計局 (DOSM) が3月25日発表した2024年2月の消費者物価指数(CPI、2015年 = 100)は132.1となり、前年同月比1.8%上昇した。  
この2月のインフレ率の上昇は、特に「住宅、水道、電気、ガス・その他燃料」が2.7%、「レクリエーション、スポーツ・文化」が1.6%、および交通が1.2%上昇したものによる。  
「住宅、水道、電気、ガス・その他の燃料」の増加は、主にサブ指数「住宅に関連する雑多なサービスと水供給」が29.7%上昇したものによる。全体のCPIウエイトの29.8%を占める「食料・飲料」は、1.9%のゆるやかな上昇にとどまった。  
変動が激しい食品とエネルギーの価格を除外したコアインフレ率は2024年2月に1月と同じく前年同月比1.8%上昇した。これは、食品・飲料とレストラン&宿泊サービスがそれぞれ3.1%と2.9%の増加を記録したことに起因する。

#### ● 23年第4四半期の来訪外国人、16%増に

マレーシア統計局(DOSM)によると、2023年第4四半期(10～12月)のマレーシアに入国した来訪客数は

5,430万人となり、前年同期比で16.1%増えた。一方、前の四半期比では1.6%の増加。観光支出に関しては、238億リングと前年同期比で29.5%、前四半期比で18.5%増えている。

2023年通年の統計では、訪問者数が前年比22.9%増の2億1,090万人。観光支出は849億リングと前年比32.5%増となった。しかし、いずれの数値とも、コロナ前（2019年）の水準を下回っている。

### ● 世界幸福度ランキング、マレーシアはアジアで8位

2024年の世界幸福度レポート(World Happiness Report)が発表され、マレーシアはアジアで8位となった。

この調査は2021年から2023年の期間に分析。主要な6つの調査項目には、「国の1人当たりの国内総生産(GDP)」「健康寿命」「社会的支援」「自由さ」「寛容さ」「腐敗の認識」などが含まれている。シンガポールは2023年に、「アジアで最も幸せな国・地域」としてランクイン。2年連続で「防衛に成功」した。ちなみに日本は3位だった。

調査対象となった143か国中、全世界ランクではフィンランドが首位を獲得し、デンマークとアイスランドがそれぞれ2位と3位を確保した。なお、最下位の3カ国はそれぞれレソト、レバノン、アフガニスタンだった。日本は51位。

### BB) 木材状況 :

トピックスで述べたように、マレーシア全体を襲った熱波の影響により、降雨が少なく雨季は終わったとの印象である。旧正月の休暇も終わり、伐採業者も伐採を再開し始めたが、合板市場の低迷により、伐採も様子見になりそうな状況である。

工場の稼働も受注が少ないことがあり、低水準の稼働となっているが、今月に入って加速した円安の影響もあり、再び身動きの取れない状況に陥ってしまった。国産合板も値上げを打ち出しており、輸入合板も為替要因は大きいですが、現地コストは下がらない様相にあるので、覚悟を決めて取り決めるステージではないかと考えている。

## インドネシア

インドネシアにとって合板は主要な輸出品であり、特にラワン合板という商品に限定すれば世界 No.1 の輸出量を誇る。向け先（輸出先）も様々だが、相手国別シェアでは、2020年の統計では米国3割・日本3割であり、この2か国のバイヤー達の動向が相場を左右していた。だが、最近では米国が急激に数量を伸ばしてきており、日本の発言力は小さくなって来ている。日本市場では年々針葉樹合板との競争もあり、ラワン合板の需要には陰りも見られる。一方、米国全土での合板消費量は日本と比較にならない程多いものの、インドネシアからの輸入シェアは約1割程度とまだ低い。忘れてはならないことが、米国は年間604万m<sup>3</sup>の輸入国である点。仮に米国が急に“買い”に入れば、瞬く間に相場高騰になる可能性を秘めている。先のウッドショックが最たる事例だ。

米国のとある資料によると、同国の 2024 年 1 月のハードウッド系合板の輸入量が前年同月比において、ほぼ 2 倍の合板が輸入されたという (29 万 m<sup>3</sup>)。2022 年 1 月との比較においては 27% 減というが、裏を返せばウッドショック時の 73% までに回復していると言える。

インドネシアにおいては、米国向けに対しては賛否両論。昨今、ライバルであるベトナムからの合板が急激に米国に向かってきている為か、安値の競争にさらされている為だ。生産量を重視するか？ 販売価格を重視するか？ いずれにしても、月次 8 万 m<sup>3</sup> が米国に向かっており、ウッドショック時の数量には満たないものの、それに向かってきている事実は見逃せない。

さて、現地ではラマダン(断食)の真っ最中であり、合板工場の生産量も低いペースで推移しており、一部アイテムの船積み遅れも目立ち始めた。またラマダンが終われば、レバラン休暇に入り、その間創業を止める。今年のレバラン休暇は 4 月 6 日から 15 日までの 10 連休がほとんどで(12 工場中 10 工場が 10 連休)、また弊社ジャカルタ事務所も例外になく 10 連休となる。

我々にとっては、この休暇中にはストレスを溜めることにはなるのであるが、レバランとは断食明けを祝福するイスラム教徒にとっては神聖であり特別なものなのである。我々のお正月休暇に文句を言われたものなら。。。一切のそれを踏まえ、現在早めの発注・契約が求められていることは言うておきたい。

## 中国

不動産価格の下落、株価の続落、失業率の上昇といった負のスパイラルに入っている中国経済において、木材関連業者には完全に先行き不透明状態が続いている。公共事業をはじめ、計画されていた各都市の建設計画においても、延期や休止などが相次ぎ、生産すれど販売できない状況が長く続いている。

かつて海外向け生産を主体としていた工場が、販売数量の低迷から国内向け生産に切り替えたケースが多々見受けられた時期もあったのだが、今やその国内向け生産にも黄色ランプが点灯している状態である。現存している工場は、すべからず品質が担保できる工場のみとなり、昔のように瞬間の利を求めて、俄かにスタートを切った工場は、ほとんど消えてしまった。

これからが本当の意味でのサバイバル・レースとなるので、我々にとっては良い商品を安く購入できるチャンスが到来するかもしれない。あるいは工場によっては、さらなる付加価値品へのチャレンジを行う事で、我々にとってメリットのある製品が生み出される機会が到来するかもしれない。しばらくデフレ傾向に向かっていく中国に対して、人民政府がどのような適応策を打って出るのか非常に興味津々だ。

中国で節約志向が高まっているというニュースを見た。「爆買いから節約へ」という流れはどの国にもある共通の時代の流れといっても良いのかもしれない。節約志向(中国語では消費降級)は特に若者達の間で広がっているようであり、昨今の不景気や失業率の上昇がその原因の一つとなっているようである。中古品を販売する店では、俄かにブームを迎えており、売り上げが右肩上がりだと、その映像では「明るい笑み」を映し出していた。

日本においても、ある時期からトレジャーなんちゃらとか、BOOK なんちゃらといった中古品(新古品)店をあらゆるところで目にするようになったが、中国でもその始まりとなるのだろうか？ もちろん店舗型

ではなく、今の時代においては、アプリで購入という流れが主流となるので、日本のように店舗を展開するような発想は中国人にはないのかもしれないが、中古品だからこそ、現物を見てから買いたいと思うケースは中国人にも少なからずあると思われる。

我々の頭のどこかに必ずあるとっていい中国製品に対する思いは、中国に住む人たちの頭の中にも、少なからずあると言っても過言ではないだろう。その対象が中古品となれば、なおさら現物を見てから、という考えに至りそうである。

まだまだ消費意欲が高い中国ではあるが、20年ほど前は月光族という言葉が飛び交っていた。毎月の給料をその月のうちに使い切ってしまう若者に対してあてられた俗語なのだが、昨今は節約志向が若者の間で流行りのようだ。若者の節約志向という流れは、中国の消費低迷にさらなる拍車がかかり、景況感はさらに悪化すると見る向きが一般的な見方となるのだろうが、これからの時代はそれでも良いのかもしれない。もちろん、中国の若者層だけの話なので、これが今の中国の主流であるとは決していえないのだが、2023年11月11日（独身の日）は、毎年売上実績を公表して爆買いアピールしていたアリババ（中国の最大のEC企業）でさえも、詳細の実績は公表しなかった。これは若者達の消費意欲が下がり、2023年独身の日の売り上げが大々的に伸びなかった事を如実に示しているのだと分析している人もいる。

若者達の消費意欲の低迷は上述した通り、中国経済の停滞感や、失業率の問題による今の時代の流れともいべき潮流であり、頭の良いエコノミスト達あたりからは、それを悲観する論調が繰り返し報道されていくのだろうが、環境の時代を生きる若者達からすれば、これは決して悪い事ではないと考える方が今の時代に合っていると強く感じている。

## ベトナム

ベトナムの木材輸出相手国の上位は、アメリカと中国が例年圧倒的なシェアを誇る。中国においては、ベトナム木材輸出の全体に占める割合は25%を超えており、アメリカもそれに次いで20%以上のシェアを誇る。近年においては、輸出金額で3位に日本が食い込むようになり、韓国は4位が定位置となっている。日本のシェアは15%前後であり、韓国は10%前後のシェアとなっている。

ベトナムの木材生産量は年を経るごとに植林地が増大している為、毎年右肩上がりである。また、ベトナムからの輸出品目においても、廉価製品よりも家具用や土木用の商品が増してきており、今後ますます需要に応じて、出材される数量は増えていく見通しとなっている。

昨今、アメリカ経済の停滞に伴い、ベトナムだけではなく、東南アジア各国においても、アメリカ向けの輸出数量は伸び悩んでいた。しかし、昨年の秋口から、アメリカ向けの注引量が回帰し始め、インドネシア、マレーシアにおいては現在、アメリカ向けの注文が一杯の状態となっている。アメリカ経済復調の波は、やがてベトナムに届いてくるのも時間の問題とされていたが、先月あたりから、その波がよいよ到達してきている。

アメリカ向けの生産を行う工場向けに、スタイラックス単板が大量に購入されている事例が、各地から聞こえてきており、いよいよ単板価格の上昇が囁かれ始めている模様だ。また、中国向けには家具や、製材

品の輸出が主体的な商品だったのが、コロナ明けから合板のような一次加工製品が多く輸出され始めており、そのような合板工場向けにも単板が大量に供給され始めている。

このような動きにおいて、スポット的な流れで収まれば、その影響が我々に響いてくる事はないのだろうが、間違いなく影響は直撃してくるだろう。安く購入できる時期は、間もなく終焉を迎える、と考えた方がベターである。

田ウナギの話。

ベトナムで食べるウナギは、日本のいわゆる“あのウナギ”とは違う。当然ベトナムでも養殖に成功した事で、日本人が想像するウナギを食べれる店も有るようだが、私は行った事がない。ベトナムで普段食べるウナギは、いわゆる田ウナギであり、知っている人は少ないかもしれない。ベトナム語で LUON (ルオン) と書かれた店はそれほど多くはないので、店を探すのも大変だ。

一般的に PHO (フォー) や BUN CHA (ブンチャー) の店は、至る所に店を連ねている為、どこに行っても探し出す事は簡単なのだが、LUON (田ウナギ) の店はなかなか見つからない。

さて、この田ウナギだが、日本で一番見た目が近いと思われる食べ物が、アナゴという人が多いようだが、私からすればドジョウが一番近いと感じる。ドジョウに比べれば、サイズが大きいし、味も全く違うので、ベトナム人からその意見は全否定されてしまうのだが、個人的な感想としては、やはり大きめのドジョウだと感じてしまっている。この田ウナギ、食べてみると、まあ美味い。スープにして麺をつけて食べる、いわゆるつけ麺風の食べ方が一般的のようだが、お粥が最高のお気に入りだ。

昨晩は飲み過ぎた、という朝は厳しい胃袋の状態になっている。そのような過酷な腹の環境下において食べる朝のウナギ粥は何とも言えない優しさに体中が包まれる (写真参照)。

日本でいうところのどんぶり飯サイズのお椀で運ばれてくるので、こんなに食べれるのか？と最初は思うのだが、いとも簡単に平らげることの出来るこの優しい田ウナギ粥を、是非とも堪能して頂きたい。



次の話題も食の話となるが、今度は鳩である。

日本におけるハトとは、平和の象徴という観点から食す事はないという考えは第一前提としてあるのかもしれないが、元来ハトを食べる習慣はない、というのが正しい見方なのかもしれない。

世界の国々を見渡せば、ハトを食べる習慣を持つ国は多く、ベトナムもそのひとつである。ベトナムにおけるハトは、食文化として普段から日常食べるものとまでは定着していない。なぜなら、鶏やアヒルに比べれば小さい割に価格がやや高めだからだ。また、食べられる店も多くない為、庶民の一般的な食文化に

馴染んでいるとは言い難いところがあるのも事実。実際に、メニューとして出している店は少なく、これまた店を探し出すのは困難となる。揚げたハトは最高に美味しいので、ビールのお供として是非ともトライして頂きたい。

ベトナム人にとって、食用として考えられているハトは、日本に住んでいるベトナム人達にも、食べている人がいるに違いない、と言ったのは、我が社のベトナムスタッフである。

このベトナム人スタッフが若かりし頃、技能実習生として日本に住んでいた時があった。来日して間もなくして、日本に不景気が見舞われ、仕事が思うように与えられなかった時期があった。当然ながら給料も減らされ、若いせいもあってか、とにかく腹が減る事が多かったのだろう。その時、自分の空腹を満たしたのが、その辺にいるハトだったという。

ベトナム人男性の多くは、ニワトリくらいは誰でも簡単に捌けるため、ハトもその類となる。たくましいなと感じる一面もあったが、いま日本で暮らしているベトナム人達も、きっとそのようにして生活を送っている若者もいるのだろうと考えると、複雑な気持ちにもなる。

特にコロナ渦の時代においては、多くのベトナム人技能実習生達が職に飢えていた。そんな時、ベトナム人の中には、自らの飢えを凌ぐため、野生のハトを見つけては食べる生活を営み、何とか飢えを凌いできた人達も、いたのだろうと推察する。空腹を満たす為の動物は、もちろんハトだけではないのだろうが。

こんなサバイバルを身に付けている人たちに、パンばかり食ってる白人たちが勝てるわけがないと、改めて感じ入ってしまった次第である。

## ロシア関係

AA) トピックス：

1) 「不実な美女か貞淑な醜女か」：

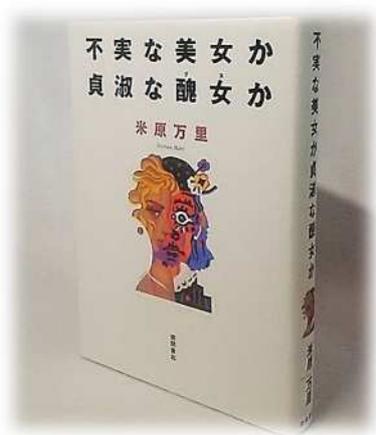
外国語文書の翻訳や会話の言語変換である通訳に苦労した。大勢の人たちの前でちょっとした、本当にちょっとしたスピーチの逐次通訳をした際に、一度つまずくと焦りに焦りまくり、発言者が次々と繰り出す音声についていけなくなったことを思い出す。今でもそのシーンが夢に出てきて盗汗でびっしょり状態になることがある。文書翻訳にしてもそうだ。日常的に使用されている言葉であれば、何とか対応できるのだが、専門的な単語が頻出する文書だと、それこそ辞書を片手に根気強く読み進めるしかないので、時間と労力を要してしまう。そのうち疲れがピークに達し、漸くやり切ったと胸を撫でおろすのも束の間、後に訳文を読んでも全く日本語の文章の体をなしていない。恐らくそんな文書は日本語で読んでも理解できない専門性の高い範疇に属するものだからなのだろう。

かように外国語を習得し自在の域に達することは困難だ。今では AI による翻訳機能を使えば、だいたいは事足りてしまう。AI 通訳というものもあるらしい。きっと人工知能を利用した翻訳・通訳には限界があるはずだと思いたいのだが、恐らく無限なんだろう。日本人は外国語コンプレックスから解放され、外国語学習の在り方も変容していくことだろう。これまで外国語に悩まされていた余計な時間の解消は、より一層有意義な時を過ごすことにつながるので極めて有益である。

今回のテーマに沿った話題に転じる。2006年に亡くなったが、第一級のロシア語の同時通訳者であり、エッセイスト、作家でもあった米原万里さんによる本のタイトルを標題にした。同時通訳の職というものは、私の想像を絶するほど過酷なものだと思う。最初に述べたちょっとした通訳でも死ぬ思いをするほど過酷なのに……。異文化の摩擦点ともいえる同時通訳の現場は緊張の連続。思わぬ事態に出くわすと、それをとっさの機転でピンチを切り抜けるスキルが重要になる。米原女史はそれが巧みだった。テレビニュースなどで同時通訳者が彼女であることを知ると、まず安心。その言葉選びも言葉遣いも非常にユニークだった。しばしば同時通訳で逐語訳する人にお目（お耳に？）にかかることがある。正確に訳すことを心掛けていたので、訳語が文語調で堅い。翻訳でよく使われる「～するところの」というような訳し方。実際の会話文ではまず使用されることはない。日本語と外国語の語順が影響しているのか不自然に聞こえることが多い。

米原女史はそのような通訳をしなかった。長いロシア語の発言を同時通訳しているのに、日本語訳はどうしてこんな短いのか？と思う時すらあった。無駄な言葉は訳さなかったのだ。いわゆる「意訳」の名手だった。そう、彼女がエリツィンのお気に入りだったことは有名だ。大統領になる前に来日した際に通訳を務め信頼を得た。その後、大統領に就任したエリツィンは来日時の通訳者に米原女史を指名したほどだった。

ここまで書けば標題の意味はお分かりいただけるだろう。「不実な美女」とは、無駄を省いて本質を伝える「意訳タイプ」。「貞淑な醜女」とは、重箱の隅をつつくほど一字一句原語に忠実な「逐語訳タイプ」のこと。米原女史は言わずもがな「不実な美女」だった。さて私はどれに分類されるか問われると「不実な醜女」。最もダメなパターン。



本の表紙より

米原万里さんには数回お会いしたことがある。豪快でユーモア溢れる女性だった。同時通訳者として人気を博したのも、「不実な美女」的な仕事ぶりだけでなく、その人柄が買われたからだろう。通訳の現場は、異文化接点の最前線だけに緊張の連続であり、さらにハプニングも付き物なだけに喜劇の宝庫。それを切り抜ける巧緻性が求められる。そのような話を下ネタやアネクドート（小噺）を交えて語っていたことは懐かしい思い出だ。また彼女は、日本にはびこる英語偏重の風潮を危惧していた。「日本はアメリカ文化圏にあるが、それを絶対視しないためにも、もうひとつの言語を学ぶべきだ」と言ったり、「アメリカの歴史的視点を無視した言葉の規制は成功しない。英語偏重は複眼視を妨げるおそれがある」と訴えたりした。ロシア語の通訳者だからこそ余計に米国を敵視しているのに違いない、ということはさておき、傾聴に値

する。

同時通訳者はAIの時代を迎え、なくなっていくのだろうか？ 需要が減っていくことは間違いない。米原女史なら『AIで十分なんじゃない。私は失職よ』と皮肉交じりに冷笑したに違いない。ただ、生身の人間が「不実な美女」を実現する方が、コミュニケーションを円滑に進める意味でも有益であると考えている。逐語訳になりがちなAI……。

彼女の著作には、自伝的作品「嘘つきアーニャの真っ赤な真実」や「オリガ・モリソヴナの反語法」、エッセイとして「ガセネッタ&シモネッタ」や「旅行者の朝食」など痛快なものがある。『ドジ通訳者』の立場からだが、是非とも一読をお勧めしたい。

## 2) 「ローマ教皇の発言」:

キリスト教カトリック教会のトップであるフランシスコ・ローマ教皇が、ウクライナがロシアに対し「白旗を掲げる勇気」を持つべきだと発言したことを受け、ウクライナ当局はヴァチカン（ローマ教皇庁）大使を呼び出した。

ウクライナ外務省によると、同国政府はヴァチカンの駐ウクライナ大使に対し、教皇の発言に「失望した」と伝えたという。外務省は大使の呼び出しに関わる声明を発表。「教皇庁のトップは強者の権利を合法化し、ロシアが国際法の規範をこれ以上無視するのを奨励するのではなく、善が悪に確実に勝利するため急いで力を合わせる必要があると世界にシグナルを送ることや、被害者ではなく加害者に訴えかけることが期待されると伝えた」とした。

今回の教皇の発言をめぐり、スイスの放送メディアがインタビューの発言録を公表したことにより、ウクライナでは怒りが広がっていた。この発言録の内容によると、教皇は「最も強い者とは、状況をみて国民のことを考え、白旗を掲げる勇気をもって交渉する者だ」と発言した。特筆するまでもなく、白旗は伝統的に戦場での降伏の象徴となっている。ヴァチカンの報道官は、教皇は降伏ではなく交渉によって戦闘を止めようと話していると語り、説明した。

それでもウクライナは、明確に不快感を示そうとしている。ウクライナは、ロシアによる侵攻から2年以上が経過した現在、ロシアに屈服するとの見方を打ち消そうと躍起になっている。ゼレンスキー大統領は演説で、「この戦争の正当な終わり方を決めるのはウクライナであることを確実にするため、今こそ私たちが最大の集中力と最大の取り組みを示す時だ」とか、「私たちは耐えられる。私たちは勝たなくてはならない」と国民に訴えかけた。さらに、ゼレンスキーは、ロシアの脅威に対応するため、ウクライナは全長2000キロメートルに及ぶ防衛要塞を建設中だとも述べた。既存の要塞を補強し、新たな要塞も築いているという。これらは好戦的なムードを醸し出すもので、あくまでもウクライナが勝利（その分岐点は最近少しずつ変化している）を獲得しない限り、徹底抗戦する気概を失うことはない。だが、現実としては、ウクライナ市民の間でゼレンスキーへの支持率は低下しており、若者を中心に「徴兵」を避けるため、国外に脱出するケースが増えている。

西側のウクライナへの「軍事支援」にも課題が多い。米議会上院情報委員会で中央情報局（CIA）のウィリアム・バーズ長官は、戦局はロシアが有利に展開しているとの見方を示した。そしてウクライナはさらなる支援が得られなければ、今年中に「大きな地盤」を失う可能性が高いとも指摘。長官は、「ウクライ

ナ人が勇気と粘り強さを失いつつあるわけではない」と述べたが、一方では「彼らは弾薬がなくなりつつあり、私たちは彼らを助けるための時間がなくなりつつある」と語った。米国は戦争を続けるウクライナにとって最大の支援国だが、このところ支援が停滞している。下院は、ウクライナへの600億ドル(約8.8兆円)もの軍事支援を含む950億ドル規模の予算案をめぐって行き詰まっている。今秋の米大統領選挙で大統領が交代すれば、支援が完全に途絶えることも懸念されている。ウクライナの国防相は先月、欧米によるウクライナ支援の半分が遅れており、ウクライナの人命と領土が犠牲になっていると述べた。

このような状況下におけるローマ教皇の今回の発言。要するに、ゼレンスキーは、この発言はウクライナに対してロシアと戦争終結を交渉するような呼びかけであり、教皇による「事実上の仲介」だと感じたのだろう。そして拒否をした。

ゼレンスキーの言葉を引用する。「ロシアの悪が2月24日にこの戦争を始めたとき、すべてのウクライナ人が防衛のために立ち上がった。すべてのキリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、あらゆる人が立ち上がった。私はすべてのウクライナの聖職者に感謝する。彼らは、前線で命と人間性を守っている軍とともにある。彼らは祈り、語り、行動で私たちを支えてくれている。これこそが、人々とともにある教会なのだ。2500キロも離れたこの場所は、生きたいと願う人と滅ぼしたいと願う人を事実上仲介するような場所ではない」。なかなか巧みな言い回しである。

一方のローマ教皇の言葉も引用する。「ひとつの解釈であることは事実だが、最も強いのは、状況をみて人々のことを考え、白旗を掲げる勇気、交渉する勇気を持っている人だと思う。今日、あなたは世界の大国の助けを借りて交渉できる。状況が悪くなる前に交渉することを恥じないで」。この双方の言葉を知った我々はどのような感慨を持つだろうか。自問してみよう。

数カ月前の産地情報で、ウクライナ国内に存在する東西問題を宗教の観点から紹介した。宗教に関わることを再度見直してみると：

=QT

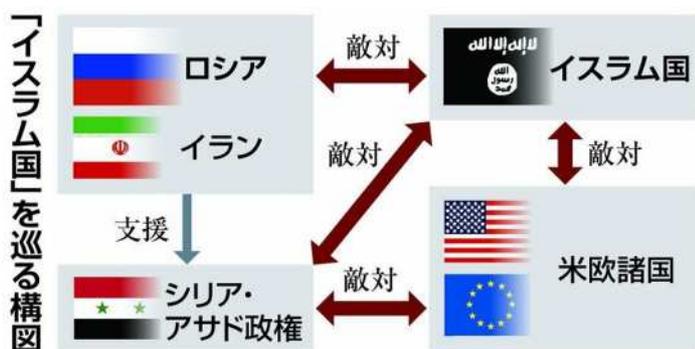
ウクライナでは歴史的にも地理的にも分裂していることが常態化していた。西と東に。西にはウクライナ語の話者、東にはロシア語の話者が多く住む。西は農業、東は工業が盛ん。歴史も文化も伝統も異なっている。それよりも最も大きく異なるもの、それは精神的な支柱ともいえるべき「宗教」。どちらもキリスト教ではあるが、東は「ウクライナ正教」との関係が強く、西は「ユニエイト」(東方典礼カトリック教会)が主流。ユニエイトとは、典礼方法は正教会と同様だが、教会組織としてローマ教皇を総本山とみなす(叙任権はローマ教皇が持つ)。いわば正教会とカトリックの中間の存在。この「宗派」を理解することなく、ロシアとウクライナについて地政学や安全保障論(NATOの東方拡大問題)だけで議論すると、一方的な結論に走る可能性がある指摘されることは多い。

=UNQT

ロシアはウクライナの東部・南部の4州の「領土割譲」を実現することを目指して「特別軍事作戦」を遂行してきた。当地にはロシア語の話者が多く居住するなど親ロシア系住民が多い。宗教も正教を信仰する者が多数でロシアと親和性がある。一方、リビウを中心とするウクライナ西部には「ユニエイト」(東方典礼カトリック教会)信者が多い。今回のローマ教皇の発言により、西部住民のウクライナ戦争にかかる意識がどう変化していくのか。先述した「徴兵」逃れと大統領支持率の低下、先月の産地情報でふれた軍総司令官の解任と交代もあいまって、厭戦ムードが今後一層高まっていく可能性は十分ある。

不正に溢れたロシア大統領選挙。ウクライナの東部・南部4州やクリミアでも投票が行われ、ヘルソン州での得票率88%を除くと、いずれも90%半ばの得票となった。過去最高の得票率で通算5期目の当選を果たし後顧の憂いを断ったプーチン。国民の絶大なる支持を背景に予備役の追加動員を進め、ウクライナへの攻撃を激化させる可能性は十分ある。欧米諸国のウクライナ支援の緩慢さや、「もしトラ」の事態を迎えるようになると、無辜のウクライナ市民にさらに大きな悲劇をもたらすことは必至だ。

つい先日、モスクワ郊外のコンサート会場で武装グループによる乱射テロ事件が起き、多くのロシア市民が犠牲になった。米国政府から事前に攻撃計画の可能性が示唆され、ロシア当局に情報共有されていたにも拘わらず、未然にこのテロを防ぐことができなかったことへのプーチン批判が高まっている。プーチンには、1990年代後半の首相時代にチェチェン共和国への進攻のきっかけになったモスクワのアパートなどで起きた連続爆破事件や、2000年代早々のモスクワの劇場を武装集団が占拠し観客が犠牲になった事件、そして北オセチア共和国での学校占拠で子どもたち300人以上が死亡した痛ましい事件（いわゆるベスラン学校占拠事件）などの前例がある。今回はロシアの「自作自演」ということではなく、イランとシリアとの関係の深いロシアと敵対関係にあるIS（イスラム国）が、テロ事件の首謀者であることは明白だが、プーチンは下手人がウクライナに逃げ込もうとしたことを指摘し、ウクライナがこの事件に関与した可能性を示唆した。それはないにせよ、閉塞感のあるウクライナへの「特別軍事作戦」において、大統領に再選されたことで市民から「錦の御旗」を得たプーチンが、脅威を煽り「惨事」に便乗するショック療法的手法でロシア市民の一層の団結を狙ったのだろう。ウクライナに対する市民の憎悪を増幅させる目的？過去のプーチンの所業を振り返ると、今回の事件も過去の事案と同じ常套手段ではないかと勘繰りたくなる。それはともかく「特別軍事作戦」から「戦争」へ「格上げ」しようとする企図していることは明らかだ。そんな時期だからこそ、もうこれ以上プーチンを過激化させることなく「暴走」を避けるためにも、ウクライナ政府の「変化、変調」を期待する。ローマ教皇の発言をきっかけとして停戦実現への気運が高まっていくことを望んでいる。



産経新聞より

BB) 産地現状 :

2月末の首都圏におけるロシア製品の在庫数量は25,600m<sup>3</sup>と前月に比べ1,900m<sup>3</sup>の増(直近の在庫量は約24,000m<sup>3</sup>)。今年1~2月のロシア製品の入荷量は約77,500m<sup>3</sup>で、前年同期の約70,200m<sup>3</sup>と比べると少し増えている。

産地サイドからの新たな赤松垂木の提案価格は前回比\$30高であることを先月お伝えしたが、それに伴い

国内価格も上昇している。流通在庫の少ない上級グレードの価格は、10万円超の水準。これが仮需なのかどうかの見極めは必要だ。上級グレード以外の中級、下級グレードの国内価格もそれにスライドする形で上昇。

産地の一部メーカーは、生産、輸送コストなどの上昇を理由に、さらなる値上げを示唆しているが、全般的に国内需要は停滞しているため、これ以上の価格提案になると、手当てを躊躇せざるを得ないとの認識がある。この産地の値上げ基調に収束する兆しはみえない。ウッドショックの際の価格に近付いているとの声も上がっている。いずれにせよ、ロシア材の割高観は否めない。

垂木の中級、下級グレード価格の居所が高くなると、国産杉のKD垂木との値差が広がるばかりとなる。いくら赤松の品質が杉製品よりも優っているとはいえ、住宅販価を押さえるため材料費の圧縮が顕著になればなるほど、杉への代替が一段と広がりかねない。

完成品だけでなく原板にも値上げの兆しが生じている。昨年末から入荷遅れが目立ち始め、品不足が叫ばれるようになった。とはいえ、一方では需要の弱さが顕在化する現実が横たわっている。

## ニュージーランド関係

AA) 商況/産地現状 :

ニュージーランド産ラジアタ松丸太の2月積み価格(3月入荷玉)は、前回価格から数ドル高だったことは先月の産地情報で述べた通り。次回は4月積みとなるが、その交渉は4月中旬に始まるという。丸太相場はまだ不透明だが、世界的なフレートの上昇は、NZからの丸太を輸送する船にも影響を及ぼしており、船運賃が高騰している。水位低下による航行制限によるパナマ運河や情勢悪化のスエズ運河を回避することで長距離ルートになるため、輸送に時間がかかっていること、並びに中国の旧正月明けで貨物量が増えていることが船運賃に影響を及ぼす要因と考えられる。一方で、中国は旧正月の影響で荷動きがなく、丸太在庫は増えている模様。旧正月明けの丸太の動きは確実に増えてくるとの見方は強いが……。

いずれにせよ、丸太の輸入コストが上昇していることから、国内挽き業者は採算が厳しくなるため、製品販価の値上げを検討し、今度こそはそれを実現したいとの思いがある。国内輸送費のコストアップももうすぐそこまできていることも一因。杉を併用して製材するメーカーは、梱包用杉材の受注は順調になるだろうとの感触をもっている。NZ材を使用するか杉材かで明暗が分かれている。

BB) トピックス(「揺れるニュージーランド外交」):

ニュージーランドが近年、世界から脚光を浴びてきた大きな理由は、若く進歩主義的なジャシンダ・アーダーン元首相のおかげだといえる。彼女の言動については、これまで再三ふれてきた。2019年に南島の中心都市クライストチャーチのモスクで銃乱射事件が発生した際のアーダーンの示した深い思い遣りや、コロナ禍の初期に講じた断固たる措置は、世界の「左派」を大いに喜ばせた。でも、意外にアーダーンには右寄りの一面もあった。それを感じたのは、中国との戦略的な競争関係と、英語圏5カ国の情報共有体制である所謂「ファイブ・アイズ」(Five-Eyes)への参加姿勢だった。ファイブ・アイズとは米英などアン

グロサクソン系の英語圏の5カ国による機密情報共有枠組みの呼称で、米英両国が立ち上げ、その後カナダ、オーストラリア、NZが加わった。米国以外は英連邦の構成国だ。

アーダーンの辞任後のNZは、タカ派的な外交政策を取るようになった。ファイブ・アイズとの協力も一層拡大するとの期待感が高まると考えられていたが、話はそう簡単ではない。国民党の党首であるラクソン首相は中国寄りで、ファイブ・アイズの他の構成国の保守派とは一線を画している。つい最近、ラクソン首相は中国の王毅外相とNZの首都ウェリントンで会談し、経済や人的交流などの分野で協力することを強調した。中国としては経済力を背景にして、特に米国と連携するNZとの関係を構築したい狙いがあるとみられる。

このようなNZの動きは、米国にとって懸念材料となる。国民党は、中国に対抗することを念頭に置いた米英とオーストラリアの安全保障の枠組み「AUKUS（オーカス）」に、NZが参加することにも消極的な姿勢を示してきたからだ。かつて、国民党が政権を握っていた2008年から17年、英国やオーストラリアの外交官らは、NZのおかげでファイブ・アイズは「5つの目」ではなく「4つの目と1つのウインク」になったと皮肉った。つまり、脅威を監視する体制が甘くなったことを意味したのだろう。

以前にも述べたが、ラクソン首相のキャリアは、前ニュージーランド航空CEOであり、世界的な食品・日用品大手ユニリーバの経営幹部も務めていたせいも、対中国の安全保障協力よりも中国との貿易拡大を重視している。アーダーンも首相に就任した当初は、中国が10年以上にわたる最大の貿易相手国であることを理由に、トランプの牽引する反中姿勢に与することに慎重な対応をみせていた。ただ、NZの公安当局が地方政治への中国の干渉に目を光らせ、国の防衛戦略が中国をパートナーではなく脅威とみなすようになると、アーダーンの対中方針はより強硬なものに変容していった。中国によるウイグル弾圧にかかる人権問題も影響したのだろう。経済と安全保障の挟間で揺れるNZ外交。逡巡するNZに対し中国は経済を盾に取り揺さぶっていく……。中国に貿易面で依存するNZ。NZの対中姿勢は、隣国のオーストラリアと比べ国の規模が小さく中国サイドからすれば関係を断ちやすいことから、常により穏健だ。中国にとってNZの乳製品と食肉は他国からの輸入で代替が可能だが、オーストラリアの鉄鉱石はそうはいかない……。

中国の王毅外相との会談の数日前に、ウェリントンでベトナムのファム・ミン・チン首相とラクソン首相との首脳会談が開催されたことにも注目だ。会談で両首相は、二国間協力をさらに深化させていくことで一致、政治・外交面で両国は2021年から2024年までのベトナムとNZの間で戦略的パートナーシップ行動計画の効果的な実施を促進し、次の期間の行動計画を早期に策定することで合意した。また、国防・安全保障に関して両首相は、サイバーセキュリティや国防産業の分野での協力を拡大し、越境犯罪やテロ、麻薬密売対策における協力を強化することにも合意した。さらに、経済・貿易・投資に関して、両首相は今年中に両国の貿易総額を20億ドルにし、2026年までには30億ドルを目指すこととした。

安全保障問題に関しては、ベトナム東部海域（南シナ海）の平和、安定、安全、航空の自由を確保し、国際法に基づいて平和的措置によって紛争を解決する重要性を再確認。また、両首相は、この海域を平和、安定、友好、協力、発展の海域とするため、情報共有や「海洋協力」を強化することで一致した。これには中国を牽制する考え方もあったのだろうか。「揺れるニュージーランド外交」の標題を付けたが、揺れるのではなく「バランス溢れる」、もしくは「日和見」、あるいは「したたか」と称することもできるだろう。

米国べったりのどこかの国の追従・追従外交とは明らかに異なる NZ の外交。参考になるかもしれない。

## 欧州関係

AA) トピックス (「キム・フィルビー」):

ドイツ空軍トップらによるウクライナへの軍事支援の協議内容がロシア側に漏洩していた疑惑。ドイツ国防省は「空軍内での会話を傍受された」とみて調査を始めている。ショルツ首相も「非常に深刻な問題だ」と述べ、迅速な調査を求めた。

ロシアの国営メディアは、ドイツ空軍トップらによる協議内容の 38 分間の音声データを SNS 上に投稿した。同メディアの編集長はロシアの安全保障当局者から入手したと説明しているという。

ドイツメディアによると、この音声データは、空軍トップの総監ら幹部が、ウクライナが求めるドイツ空軍の長距離巡航ミサイル「タウルス」を供与する場合の支援方法などを協議している内容だとする。タウルスで攻撃可能な対象として、ロシアが実効支配するウクライナ南部クリミア半島とロシア本土を結ぶクリミア橋にも言及しているという。ドイツの公共放送などによると、音声は去る 2 月に行われたオンライン会議におけるものとみられ、独国防省の報道官は「ドイツ空軍での会話が傍受された」と述べた。オンライン会議は民間のウェブ会議システムを使って開かれたとされ、情報管理のずさんさも指摘されている。

この類の会話の傍受はしばしばある。ロシアのスパイの歴史を考えると、通信傍受などお茶の子さいさい、お手の物。対象国や対象人物を定めると、スパイを送り込みインテリジェンス網を張り巡らせる。特にイデオロギー対立が過熱していた冷戦時代には、米ソ両国間で頻繁なスパイ活動が行われていた。それに加え、英国の 007 シリーズでお馴染みの MI6 やイスラエルのモサドなどの諜報機関も暗躍した。彼らは機密情報を入手したり、対象国における扇動や人心収攬に努めていた。

数年前の産地情報でソ連の二重スパイについて言及した。オレグ・ゴルディエフスキーというソ連・KGB のスパイを中心に記述した。彼はソ連邦という国家体制の申し子だったが、ソ連によるハンガリーへの介入や、東西対立の最中にベルリンの壁が築かれたことを機に、愛すべき国家へ疑義を抱くようになる。そして、世界の安寧を実現する自負とその任務を担う諜報部員という職にも疑問を呈し始める。この心の移ろいが、やがて「敵国」である英国の MI6 へ情報提供を行うスパイに仕立て上げる。二重スパイ。ゴルディエフスキーのような二重スパイは、西側にも多く存在していた。MI6 の長官への就任が確実視されていた英国人キム・フィルビーはその中でも最も有名な人物である。彼は戦後、西側に最も大きな衝撃と打撃を与えた二重スパイと称されている。英国のジャーナリストから本来の志望先である MI6 に移る。その後、幹部になりながらも 30 年にわたり祖国や同盟国、さらには家族や親密な友人たちを欺き通した。名門のパブリックスクール (イートン校) からケンブリッジ大学とエリート校を卒業した。エスタブリッシュメントとして前途洋々たる輝かしい未来が広がっていた彼の社会人生活のとば口で、何が起きたのか。それは当時ソ連の体制の礎となっていた共産・社会主義思想だった。時あたかもヒトラーのナチズムが欧州を席卷していた時代。ナチズムと共産・社会主義はどちらも独裁主義的であるとの観点から同根と思われるが、彼は、ソ連こそがナチズムに対峙し得る存在であり、反ナチズムを標榜する西側諸国と考えを同じくするとの観点から、MI6 の情報部員であることと、ソ連に与することに何ら矛盾も感じることは

なかった。「欧州で拡大するファシズムに対抗できるのは共産主義しかない」という当時の思想的な潮流と時代のうねりが影響していたのだろうか。

ソ連のスパイになっていくプロセスはこうだ。フィルビーは進んでマルクス経済学者の指導教官を訪れ、国際的な共産主義組織「コミンテルン」のパリ駐在工作員を紹介される。その工作員から、さらにオーストリアの共産主義組織につながっていく。フィルビーはウィーンへ向かい、そこで知り合ったのが 22 歳のユダヤ人女性（後に結婚するがやがて離婚）。彼女は共産主義地下組織で活動し、ソ連の情報機関とも接触していた。フィルビーは、MI6 のスパイになってからソ連に寝返ったのではない。敵国のスパイとなり、その後、本人の弁によれば「ソ連の利益のために働く潜入スパイ」として、祖国英国の情報機関に潜り込んだのである。



キム・フィルビー（ネットのフリー素材より）

諜報部員の資質に必要なものは何か？ フィルビーを語るのに最も頻繁に使われた言葉は、溢れる人間的魅力ということだった。同じエリート層に属する人たちは彼をこう評した。「笑うのが大好きな上に、酒を飲むのも人の話を聴くのも大好きで、しかも聴くときは心の底から真剣に興味津々になっていた」と。だからこそ、彼は二重スパイの疑惑が取り沙汰されたときでも、周囲の仲間たちがそれを打ち消すような言動をとった。まさかどうして彼が？ 誰からも好感をもたれる社交性が武器になっていた。

彼の二重スパイによって、西側陣営はどれほどの損害を被ったのか。フィルビーがソ連に漏らした情報により、英国や米国が画策した作戦の数々が失敗に終わる。二次大戦後、特に悲劇的だったのは、共産化された欧州・アルバニアでの反政府活動を支援する作戦だ。西側から送り込まれた工作員は、ことごとく迎え撃たれ惨殺されてしまう。フィルビーの密告によって、東側に潜入した工作員や現地の協力者も次々と囚われの身となり、処刑されていく。戦後のフィルビーの暗号名は「スタンレー」と変更され、ソ連の情報機関のなかでも重きをおかれたスパイとなった。彼のもたらす機密情報は一級品だったという。しかし、ここにフィルビーのジレンマがあった。スターリンによる粛清以降、ソ連からの亡命者は後を絶たなかった。フィルビーは、いずれ彼らから正体を暴露されるのではないかと怯えるようになっていく。

紆余曲折の末、最終的にフィルビーはソ連に亡命を果たす。怯えから解放されるが、実際にソ連で安らかに余生を送ることはできたのだろうか。いや、逆に今度はソ連内部の何かに怯えていたのではなかろうか。彼は何度も結婚と離婚を繰り返したが、最後の妻との会話は興味深い。妻は問う。「あなたの人生で大切なのは、私と子供たちなの？ それとも共産党なの？」。それに対するフィルビーの答は「もちろん共産

党だ」。そう言い切るほど共産主義というイデオロギーに肩入れしていたのだろうか。それ以上に、フィルビーは欺瞞を楽しんでいただけだったのだろうか。「スパイ大作戦」を楽しんでいた？

キム・フィルビー事件に触発されたスパイ小説には、ジョン・ル・カレの「ティンカー、テイラー、ソルジャー、スパイ」やグレアム・グリーン「ヒューマン・ファクター」が有名だ。その他にも数多くの作品が影響を受けている。これらのスパイ小説は常に私の好奇心を満たしてくれる。

諜報活動の手法には、OSINT、SIGINT、HUMINT の 3 つの種類があるとされている。まず OSINT は、Open Source Intelligence を意味し、メディアやネットなど一般公開されている情報を収集し分析する手法。次に SIGINT は、Signal Intelligence の意で、電話や無線、電磁波、GPS、IT ネットワークなどから情報を傍受する手法。また HUMINT は、Human Intelligence のことで人を介して行う諜報活動。OSINT や SIGINT と違い地道な活動が必要で、目的を達成するには長時間かかる。今の諜報活動とフィルビーの時代と比べると技術の差はあるとはいえ、この 3 つの種類・手法は概ね変わってはいない。諜報活動に携わった人物の本を読んだとき、情報源の 8 割は OSINT によるものとあった。誰も彼もが等しく得られる情報から、いかにそれを分析するかが優秀な諜報員の腕とも。それを裏付けるために、SIGINT や HUMINT が大切になるのだが、対象相手が何を密かに企図し画策しようとするのかを本当に理解するためには、その人物に直接コンタクトする HUMINT が必要になる。結局、情報収集は時代が移り変わろうが人的な魅力にかかっている。我々のビジネスも同じ。

BB) 欧州材状況 :

首都圏の欧州製品の2月末の在庫数量は26,000m<sup>3</sup>程度と、先月末に比べ1,100m<sup>3</sup>ほど減った(直近の在庫量は約27,000m<sup>3</sup>)。因みに2月の日本全国への製品入荷量は約14.6万m<sup>3</sup>。2023年11月には約14.8万m<sup>3</sup>、12月約14.7万m<sup>3</sup>、2024年1月は約13.4万m<sup>3</sup>だった。

木材製品の引き合いが全体的に落ち込んでいる中、欧州産集成材は、輸入完成品の入荷が少ないことや米松製品からの代替需要が今のところ集成材にとどまっていることで、需給は均衡している。欧州の産地の状況を述べると、フィンランドの港湾荷役部門の政治ストライキが新たな「懸念材料」として持ち上がってきた。主に集成材やラミナ製品などがこれに影響を受ける。船積みや出港も停止となるため、出荷中の24年第1四半期契約分の商品や1/2月積みの羽柄材製品の船積みも遅れることは必至。年明けに産地を襲った寒波は3月に入り緩和したが、今回の新たな要因「港湾ストライキ」により、生産・出荷の遅れを取り戻すタイミングを失っている。これにより、今月始まった第2四半期契約分の交渉において、産地からのオフア数量を通常よりも抑えるサプライヤーが出てくる可能性も指摘されている。4月積みはスキップとなる可能性が大。ただでさえ、紅海航路回避の影響で航海日数が長くなるため、入荷遅れが確実なのに……。これら要因により、国内市場では品薄状態が生じるのではないかと懸念が出始めている。さらに、日本向け以外の交渉動向も気になる。欧州域内やアフリカ向けの価格が強含んでいるとの噂があり、それが事実であれば、日本向けの数量を絞り価格引き上げとなる可能性はある。

漏れ聞こえるところによれば、第2四半期の産地からのオフア価格は、第1四半期比で数10ユーロアップ。大幅値上げとなるが、そのまま丸呑みできるかどうかは「?」。4月積みスキップにより数量低下と価格アップ。交渉妥結は4月以降にずれ込むことは必至だ。

国内の集成材メーカーに目を移すと、原料や配送のコスト高を背景に、4月以降にもう一段の値上げは必

要との意向があるという。ただ、主なユーザーであるプレカット工場からは、厳しい受注競争による採算の厳しさから、価格の値上がりは受け入れ難いとの声が上がっている。

羽柄製品であるWW間柱の3/4月積み交渉が終了した。決着した製品価格とは別に紅海航行回避に伴う割増運賃（サーチャージ）を別建てで決めたメーカーと、それを織り込んだメーカーもあるようだが、結果的に前回値より少なくともこの割増運賃分が加算され決着したようだ。寒波の影響による生産・出荷遅れと航海日数の延長により低水準の入荷が続いているため、年明け以降、間柱の品薄状態が特に流通業者の間で強まっている。産地サイドは1/2月積みの数量を絞り、3/4月積みのオフア数量は通常時並みとなったのだが、果たして全量成約に至ったのだろうか？ この度の交渉で成約量が増えるとみられていたが、産地価格の上昇や円安がもたらす輸入コストアップ、国内需要の落ち込みもあり、必要最小限の成約になったのではないかとみえる。ユーザーの反応だが、WW間柱以外に国産杉のムクやFJ製品、積層間柱、リサイクル間柱等々、国内産の競合品（代替品）の手当てが可能ということもあり、ウッドショック時のような焦りはないという。

## 北米関係

AA) トピックス（映画「オッペンハイマー」）：

先日催された今年の米アカデミー賞授賞式。日本の映画作品が受賞するかどうか話題になっていたが、原爆開発に関わった学者を主人公にしたクリストファー・ノーラン監督作「オッペンハイマー」が監督賞や作品賞など7冠を獲得した。さて日本映画はというと、「ゴジラー1.0」と「君たちはどう生きるか」が部門賞を受賞した。先月の産地情報でふれた「Perfect Days」は残念ながら受賞を逃した。

おしなべて今回のアカデミー賞では、戦争をモチーフにした作品の受賞が目立った。社会情勢を反映したということか。ロシアのウクライナ侵攻が始まって2年、イスラエルのガザ攻撃開始から5カ月と、アカデミーの投票権を持つ人々の心に戦争の影が落ちる時節も影響したのだろう。



映画「オッペンハイマー」  
のポスターより

以前の産地情報でふれた通り、「オッペンハイマー」の米国公開は昨年7月で「バービー」と同時期。いずれも大ヒットを記録したため、両作の題名を組み合わせた「バーベンハイマー」なる造語も生まれた。SNSではバービーの背後にキノコ雲を入れ込んだ画像が拡散され、日本では反発が起こった。さらに海外で作品を観た日本人からは「オッペンハイマーが原爆投下後の被害を知って苦悩するシーンはあったものの、被爆者の苦しみが描かれていない」とか「米国の勝者の喜びが表れていた半面、広島・長崎での原爆の惨禍の描写が足りない」との批判が上がっていた。「バービー」は日本で8月に封切られたが、「オッペンハイマー」の日本公開は年をまたぎ、漸く本日から公開の運びとなった。

この映画は米国側から原爆をみているため、先に述べたように、広島や長崎の惨禍を明確に表現し切っていないといわれている。しかし原爆を投下した後、オッペンハイマーを歓喜の熱狂で迎える米国民の姿を明確に「悪夢」として描いていることで、この映画を監督したクリストファー・ノーラン氏が反核の思いを込めていることは明らかだという見方もある。是非ともそのあたりを実際に確認したい。

この作品は、米国が第2次世界大戦中に原爆を開発した「マンハッタン計画」を率いるオッペンハイマーの行動と、核兵器を作り出したことによる戦後の葛藤を描いている。続いてノーラン監督にとって「核兵器」は長年関心のあった題材だったと談話で知った。その中で、彼は「複雑な矛盾に物語の価値がある」と語っている。その中身の一部を紹介する。「1980年代に英国で育ったころ、核兵器の恐怖は非常に大きく、ポップカルチャーにもしばしば登場した」という発言。そして、最初に「オッペンハイマー」という言葉を認識したのも、米ソ対立を取り上げたロック歌手のスティングの曲“Russians”（ロシアンズ、1985年発表）の歌詞に登場したことに触発されたという。

この曲については、数年前の産地情報で取り上げたことがある。その一部を引用する。

=QT

「ロシアンズ (Russians)」という曲がある。東西冷戦を皮肉った内容。1980年のモスクワ五輪に際し西側諸国は、ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議して不参加を決めた。その意趣返しで、1984年のロサンゼルス五輪をソ連と東欧諸国は揃ってボイコットを敢行する（現在ドーピング問題で、リオ五輪へのロシア人選手出場の可否が大騒ぎになっている）。ブレジネフからアンドロポフ、チェルネンコと、ソ連の最高指導者である書記長がめまぐるしく短期間で交代し、1985年3月に改革開放を進めるゴルバチョフが書記長の座に就いた。そんな不透明な時代だった。

“Russians”の歌詞には含蓄が溢れている。スティングは次に出したセカンドアルバムで“*They Dance Alone*”という曲を発表し、チリのピノチェト政権を痛烈に批判する。ピノチェトは、社会主義路線を敷く前政権アジェンデをクーデタで打倒した（アジェンデはチリ史上初の自由選挙で選ばれた大統領）。冷戦下、ラテンアメリカに社会主義政権の存立を好まないアメリカがこのクーデタを支援したことはよく知られている。クーデタで政権を握ったピノチェトは、独裁者としてチリの政治を支配し、多くの左翼系の活動家を逮捕・投獄し、虐殺した。その批判をスティングは前述の曲で試みた（因みにこのアルバムには、チリの軍政をテーマにした他の曲も収められている）。この曲は、アムネスティ・インターナショナルの趣旨に賛同したミュージシャンが行った「アムネスティ・ツアー」をきっかけに生まれた曲でもある。

話を“Russians”に戻す。この歌詞の中に原子爆弾を開発したオッペンハイマーを登場させた。広島に投下した原爆の名前「リトルボーイ」と小さな男の子という二重の掛け言葉にした比喩的表現で、これからの子供たちの未来はどうなるのかを憂えている。スティングは小学校の元国語教師ゆえに言葉に敏感で、難解な比喩や

哲学的な表現を好んで用いた。現代社会を風刺し、自らの強い意思を歌詞に反映させ得るロック界における当代一流の表現者である。

“Russians”には、先述したオッペンハイマー、ソ連の指導者だったフルシチョフ、そして米大統領だったレーガンが実名で登場する。レーガンは、1983年の一般教書演説でソ連を「悪の帝国」と非難し、デタントから対決ムードへとシフトさせた。血の通わないサイボーグのような「ソ連人」がハリウッド映画によく登場したのも、その頃である。つまり、当時西側のソ連に対するイメージは、冷酷非情な人間の住まう国家というものだった。そのようなイメージが持たれているソ連に対するメッセージ。「ロシア人も自分の子供を愛していることを願う」と繰り返されていく。

その一部（1番と2番の詞）を紹介する。

### **"Russians" by Sting**

*"In Europe and America, there's a growing feeling of hysteria  
Conditioned to respond to all the threats  
In the rhetorical speeches of the Soviets  
Mr. Krushchev said we will bury you  
I don't subscribe to this point of view  
It would be such an ignorant thing to do  
If the Russians love their children too"*

ヨーロッパやアメリカの中にはヒステリー感情が高まっている  
どんな脅威にも反応するように慣らされてしまったんだ  
口先だけで言葉ばかり飾られたソビエトのスピーチで  
フルシチョフは言った “我々は君を葬り去るだろう”  
僕はこの考えには同意できない  
ロシアの人々が心から子供たちを愛しているなら  
その行為はあまりに無知なことだ

*"How can I save my little boy from Oppenheimer's deadly toy  
There is no monopoly in common sense  
On either side of the political fence  
We share the same biology  
Regardless of ideology  
Believe me when I say to you  
I hope the Russians love their children too"*

どうすればオッペンハイマーが作り出した命がけのおモチャから 僕のちいさな子供を守れるのか？  
国を隔てるフェンスの両側で  
常識という観念を独り占めする権利なんてどちらにもないんだ  
イデオロギーに関わらず  
僕たちは人として同じ生を受ける

僕が君に言うことを信じてくれ

僕は願う ロシアの人々が心から子供たちを愛していると

冷戦時代の米ソ世界二大国。米ソ両陣営の対立構造は、大国の覇権主義として批判されていた。その冷戦期におけるイデオロギーの対立によって、次代を担う子供たちを損なうことのないよう切に願うスティングの思いが、この詞に色濃く表現されている。やがて時は移り、ゴルバチョフの登場によって、冷戦は終息を迎えていく。

今、世界的規模での核の応酬はひとまず回避されているものの、局地戦争は増大し継続中だ。さらにテロという名の新たな「戦争」が生まれ、頻発している。子供たちを愛し慈しむ心があれば、無軌道で無意味な意地の張り合いは消滅するはずなのだが、そううまく運んでいないのが現実である。

=UNQT

スティングの歌詞にはロシアの為政者に対する強い批判に溢れているのだが、欧州や米国にヒステリー感情が存在していることにも言及している。当時のイデオロギー対立は今や存在しないが、専制主義と民主主義という体制の対立や人種、宗教対立が顕在化し、不安定な世界情勢を迎えている。ロシアやイスラエルのような核保有国が紛争の真っ只中の状況下にあり、核兵器の使用が懸念されている。

ノーラン監督の談話をさらに引用し、この項を閉じる。

「核兵器の世界的影響を意識せざるを得ない。(二次大戦中は) 開発する歴史的必要性があった。同時に、新しい兵器を世界に放つことはとてつもない結果を伴うことも認識していた。これは物語の全てを覆っている」。ただ、映画を通じて観客に特定のメッセージを送りたいわけではないらしい。ノーラン監督は「物語に関心を抱いたのは、行動や地政学との関わりを通じてみえてくるオッペンハイマーの複雑さや矛盾だった。彼の経験を理解し、複雑な人間として理解することを目指した」という。「特定の行動をとった理由や、その瞬間の体験を理解してもらうことが狙いだった。彼の視点から物事をみることで分かる複雑さと矛盾がある。その複雑な矛盾にこそ、彼の物語と向き合う価値がある」。

唯一の核兵器による被爆国である日本。その一員としての立場から、不毛な権力争いやプライド、意地の張り合いが引き起こす紛争のもたらす無辜の人々の悲劇を想像し、十分理解した上で心底からそれらを憎悪する。ノーラン監督がオッペンハイマーという科学者の人間性と苦悩に思いを馳せて描いた映画「オッペンハイマー」。少なくとも、日本の観客がこの映画を機に、改めて広島・長崎に対する関心を深める一助になることは間違いないだろう。絶対に劇場へゴーだ。

BB) 産地現状 :

1) 原木、内地挽き製品関係 :

もう日本の大手製材工場向け米国産米松原木の輸出価格 (FAS ベース) の詳細は把握しづらい状況になってしまった。米材製品への需要は他の外材製品と同様に停滞感が強い。プレカットメーカーの受注が低調ということもあり、資材を手当てしようとする意欲が鈍くなっている。産地では暖冬の影響で生産現場の林道がぬかるんでいるため、伐採作業が進まず原木出材量が少ない。従い、原木価格は高止まりしており、対日向け輸出価格もコスト面を考えると上昇しているとみられる。

内地挽き大手製材メーカーは昨年から1工場がない状態で操業している。にもかかわらず、国内需要の弱さから、需給は低水準で均衡する状況にある。価格は一部製品においては、値下げの話もがきかれる。受注制限からその解除、そして価格下げと、先行きの不透明感を反映した迫力のない市況が続く。競合する欧州製品がスエズ運河の運航見合わせに伴う航路変更で入荷遅れの状況下にはあるが、需給の低位均衡もあり、手当てはじっくりと、という印象が強い。

合板メーカー向けカナダ産米松原木輸出価格は、前月比で横ばい。米国同様カナダでも暖冬の影響で出材量は減少している。だが、国内の合板メーカーは相変わらず減産を継続しており、原木を積極的に手当てする機運にはない。

## 2) 輸入製品関係 :

“スエズ運河への運航見合わせの影響における欧州材の入荷遅れなどの影響があり、北米材製品に対する供給圧力が強まると考えられていたが、それ以上に需要が縮小しており、荷動きに停滞感がみられる。内地挽き大手製材メーカーの受注制限により輸入製品を手当てしようという動きもひと段落”

この記述は先月の産地情報の冒頭と全く同じで、今もその状況は変わらない。北米では、物価高と賃金の上昇、そして北米における住宅需要の底堅さと原木不足がもたらす価格の高止まりによって、輸入製品をめぐる環境は厳しくなっている。国内では、在来向けの米松、米ツガ製品の荷動きは相変わらずで、停滞感は払拭されない。プレカット会社は受注減速により仕入れ全体を絞り込んでいる。

対日向けの産地の動きだが、内地挽き大手製材メーカーの受注制限によって、昨年の第4四半期と今年の第1四半期こそ成約数量が回復していたが、第2四半期の成約量は芳しくないとき。一方で、在来向けよりも比較的堅調な賃貸住宅向けのSPF 2×4製材品は、仕入れ意欲が高いことで、前回比より高値での成約がほぼ固まっているようだ。代替品となる杉の2×4材、また欧州産材がスエズ運河航行見合わせやフィンランドの港湾ストライキの影響で、供給不安が生じていることに起因しているのだろう。

総じて内地挽き大手製材メーカーの受注制限が引き起こした供給不安は既に終息している。今や市場に逼迫感がないため、むしろ供給に過剰感が出てきているほどだ。米松の内地挽き製品価格の方が、現地挽き輸入製品よりも割安な現状をみると、第2四半期の成約にはなかなか踏み込めないのもよく分かる。

米FRBの利下げが、いつ、何回行われるのかは注視すべきイシューである。年内3回利下げするとの想定があったが、今年の利下げは1回に留まるのではとの予測も出始めている。米国のインフレが予想以上にしつこく、うかつに利下げできないというエコノミストがいるからだ。政府としては、大統領選挙を控え、景気回復に向けて「利下げ圧力」をかけたいところではあるが……。金利の動向は、米国の住宅ローン金利の居所が及ぼす住宅需要だけでなく、外国為替相場にも影響を与える。ドラスティックな展開が生まれると、米国発で引き起こされたウッドショックの再来につながる可能性はある。ただ、当時と比較すると、日本国内における木材製品の需要は小さいが……。

因みに、定期的に指標としてみているCME（シカゴ・マーカンタイル取引所）材木先物市場の最近の市場価格は1カ月前に比べ4%ほど上昇している。

## 3) 米国の住宅着工 :

米国の2024年2月の新設住宅着工件数は、季節調整済み年率換算で152万1000戸。これは前月比10.7%増、前年同月比5.9%増と、2カ月ぶりに150万戸台となった。着工件数の内訳は、戸建て住宅が112万9000戸、5戸以上の集合住宅が37万7000戸。暖冬で建築が進みやすい環境や中古住宅の流通量が減少し

ていることが影響したとみられる。先行指標である建築許可件数は、年率 151 万 8000 戸で前月比 1.9%増、前年同月比 2.4%増。その内訳は、戸建てが 103 万 1000 戸、集合住宅が 42 万 9000 戸。尚、最近の米国の 30 年物の固定住宅ローン金利は 6.74%と直近の天井の 7.79%（昨年 10 月末）から 1.05%下げている。この影響で購入と借り換えを含めた全体の住宅ローン申請指数は伸びている。これを受けて、住宅購入申請指数は前月低下していたステージから、再び加速している。

## 概況

### 東京15号地 在庫推移 :

2023年 :

1月30日現在	:	米加製品 31,385	欧州製品 59,391	ロシアその他 75,637m3	計 166,413m3
2月27日現在	:	米加製品 30,512	欧州製品 57,207	ロシアその他 73,915m3	計 161,634m3
3月30日現在	:	米加製品 26,361	欧州製品 47,121	ロシアその他 75,588m3	計 149,070m3
4月27日現在	:	米加製品 27,317	欧州製品 40,284	ロシアその他 67,733m3	計 135,334m3
5月30日現在	:	米加製品 27,147	欧州製品 38,584	ロシアその他 64,248m3	計 129,979m3
6月29日現在	:	米加製品 27,717	欧州製品 37,567	ロシアその他 58,287m3	計 123,571m3
7月28日現在	:	米加製品 26,303	欧州製品 32,019	ロシアその他 58,950m3	計 117,272m3
8月30日現在	:	米加製品 28,216	欧州製品 32,414	ロシアその他 57,972m3	計 118,602m3
9月28日現在	:	米加製品 30,362	欧州製品 30,696	ロシアその他 58,076m3	計 119,134m3
10月30日現在	:	米加製品 32,564	欧州製品 24,831	ロシアその他 53,415m3	計 110,810m3
11月29日現在	:	米加製品 33,096	欧州製品 26,173	ロシアその他 46,718m3	計 105,987m3
12月27日現在	:	米加製品 32,772	欧州製品 28,332	ロシアその他 42,149m3	計 103,253m3

2024年 :

1月30日現在	:	米加製品 37,353	欧州製品 27,525	ロシアその他 41,810m3	計 106,688m3
2月28日現在	:	米加製品 37,138	欧州製品 25,042	ロシアその他 43,238m3	計 105,418m3

2024年3月28日現在 :

米加製品 40,774m3 欧州製品 27,205m3 ロシアその他（含む中国）39,211m3 計 107,190m3  
前月比1,772m3の減。米加製品3,636m3増、欧州製品2,163m3増、ロシアその他4,027m3の減。

### 住宅概況 :

2024年1月の新設住宅着工戸数は58,849戸（前年同月比7.5%減）で、22年1月以来、2年ぶりに単月で6万戸割れとなった。持ち家着工が1万4805戸（同11%減）と激減した。戸建て分譲も前年同月割れと低迷。一方、貸家は6カ月ぶりに前年同月を上回った。

\* 2024年2月の新設住宅着工戸数の速報値は59,162戸で前年同月比8.2%減。9カ月連続の減少。戸数の減少もさることながら、着工床面積の減少（前年同月比で13.1%減）が気に懸かるところ。貸家は増加した

が、持家、及び分譲住宅が減少。季節調整済年率換算値では79万5000戸（前月比0.9%減）。

以上

弊社のホームページもご利用ください。

<https://yuasa-lumber.co.jp>